



## 「いのちは、きみたちのもっている時間」

校長 長島 クミ子

大戸小の本の森で、「いのちのおはなし」という絵本を見つけました。この絵本は、105歳まで現役のお医者さんとして活躍をされていた日野原重明先生がお書きになりました。知っている人もいるのではないのでしょうか。日野原先生は10歳の子どもたちにむけて「いのちの授業」を長く続けていました。この絵本にはその授業でのお話が書かれています。

先生は笑顔であいさつをした後、黒板の左から右に向かって白い線を長くひきました。最初は0、最後は100。途中に10、100の手前に95と書きました。95は先生の年齢です。そして、10歳の子どもたちへ「いのちは、どこにあると思いますか。」と質問します。子どもたちに答えを考えさせながら心臓の音を聴診器で聞かせました。子どもたちと先生の心臓の音のちがいを聞かせます。子どもの心臓は速く高い音、大人の心臓はゆっくりで低い音。同じ質問をします。「いのちは、どこにあると思いますか。」子どもたちの意見を聞き、うなずきながら先生の考えを伝えます。「いのちはきみたちのもっている時間だといえますよ。」「いまきみたちは、どのようにでもつかえる自分の時間をもっている。時間をつかうことは、いのちをつかうことです。」「これから生きていく時間。それが、きみたちのいのちなんですよ。」先生は笑顔で、100歳になってからまたお会いしましょう。とわかれをつけて授業は終わりました。

【絵本「いのちのおはなし」 日野原重明・文 村上康成・絵】より

日野原先生から直接「いのちの授業」を受けることはできなくても、この絵本を通じて、先生の思いを受け取ることができると思います。先生はあとがきに、「1日1日の時間の中にいのちがあるのです。その時間をみんなのいのちとして大切にしてほしいのです。さらに、もうひとつ大事なことがあります。それは「ころろ」。おたがいに手をさしのべあって、一緒に生きていくこと。自分以外のことのために自分の時間をつかおうとすることです。」と書かれていました。

東日本大震災から11年。ボランティア活動をされた恩師から数年前に子どもたちの作文をつづった「つなみ」(文藝春秋発行)という冊子いただきました。この冊子には子どもたちの言葉で当時の様子が書かれていました。大変な状況の中でも子どもたちの言葉は前向きに書かれていて、いつか「いのち」の大切さをみなさんに伝えたいと思っていました。しかし、被災地の話は難しいと感じていました。そんなときにこの絵本に出会いました。「いのち」は「時間」、1日1日をなかまとともに大切にしながら、自分のいのちを大切につかい、すばらしい人生を歩んでほしいと願っています。

残り1ヶ月ですが、「笑顔あふれる大戸小」で毎日の時間を過ごし、最高の「卒業式・修了式」をむかえましょう。